

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

| | | |
|--|---------------------|---------------------------|
| ①分野名 : 農業土木 | ②事業名: ジャンバエ灌漑施設改修事業 | ⑦投入資金(Rp.) |
| ③開始時期: 1999 年度 3-6月 | | 1999:3,100,000.- Total |
| ④対象集落: パラッカ村カレンゲ集落 | | |
| ⑤対象者 : Jambae 灌漑施設利用者 | | |
| ⑥実施協力機関: 村長、集落長 | | |
| ⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): 1月の洪水で損壊した灌漑施設の修復。 | | |
| ⑨事業開始までの経緯: 詳細は報告書「ジャンバエ灌漑改修工事中止報告書」(日比野竜史)参照の事。 | | |
| ⑩方法について特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図 | | |
| 特記点: ・ JICA は賃金を一切提供しない。 ・ 機材に関して受益者に責任を負わせる。 ・ ポンプ灌漑への切り替えの計画。 | | 意図: |
| ⑪これまでの進捗状況と成果: ・ 受益者と合意できず中止。 | | |
| ⑫現状・問題点(反省を含む): ・ 協議会議において受益者の参加者が少なかった。一部の實力者に決定を委ねていたと思われる。 ・ 昨年、同集落内の他地域での JICA による灌漑工事が中止となったため、JICA に対する不信感があった。 ・ 借金は返済される可能性は少なく、当時の隊員が犠牲になった。 ・ 失敗例として悪く転ぶ可能性もあり、投資への恐れを増大させたかもしれない。 ・ 他、詳細は報告書による。 | | |
| ⑬今後の課題と解決方法・ハル県におけるフォローアップへの提言: ・ PUで指揮を執って改修してもらいたい。資機材以外に対する支出(人件費)が可能であれば問題ない。ただし、維持管理委員会を創設するべきである。 ・ PUにより改修がなされた際には、灌漑税をきちんと徴収する事。 ・ ポンプ灌漑に切り替えるのであれば、所有権をすぐには渡さず DINAS による監督を行なうべきである。 | | |
| ⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア: ・ 技術普及を目的に含むのなら(対 DINAS)、民間を活用すべきである。勿論発注者は技術監督を行なう。 ・ 重機類を活用すべきである。 ・ 公平性や、諸問題の早期解決のためには賃金を支払うべきである。 ・ 資材調達及び監督担当者と、作業員調達及び監督者をおいたほうがよい。 | | |
| ⑮事業をやる上での該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響: 報告書の通り。 | | |

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

| | | |
|--|---|-------------|
| ①分野名 : 村落開発・市場調査 | ②事業名: カシューナッツ二次加工事業 | ⑦投入資金(Rp.) |
| ③開始時期: 1997年4月～1997年10月頃 | | 1997: 1juta |
| ④対象集落: アナバヌア村ダチボン集落 | | 1998: |
| ⑤対象者 : 97年 女性中心の30名 <i>garden plantation</i> | | Total 1juta |
| ⑥実施協力機関: 住民及び JICA、DINAS PERKEBUNAN | | |
| ⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): 97年時 ・女性を中心とする余剰労働力の活用 ・加工による付加価値づけと収入向上 | | |
| ⑨事業開始までの経緯: 97年時 ワトゥに同じ ・対象者の選定 : 農民グループに任せ、30名が選出された。 ・トライアル実施 98年時 橋氏、高橋 住民会議 昨年度の主要メンバーがマレーシアに出稼ぎに行った。残ったメンバーと会議を実施したところ、彼女たちは今年度活動を継続する意思がないようであった。なぜなら皮むきによって手が荒れてしまうので。よって、今年度はダチボンでの活動を行わないことにした。 | | |
| ⑩方法についての特記点 | | |
| 投入: 97年 皮むき機*4 オープン*1 かまど*1 実を取り出す道具*1 シドラップ研修、UP 工場見学 | | |
| 特記点 | 意図 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・パル県の奨励作物であるカシューナッツの産業化 ・相談型アプローチ ・他者からグループへ(JEは基本的に技術指導を行わない。できない?) ・不定期集会の開催 | <ul style="list-style-type: none"> ・イ側開発政策の支援 ・自助意識醸成・ニーズとの整合性 ・国内、相互コミュニケーションルートの開拓 ・興味の特続 | |
| ⑪これまでの成果: 特になし | | |
| ⑫現状・問題点(反省を含む): 特になし | | |
| ⑬解決方法・パル県におけるフォローアップへの提言: もし戻ってきたメンバーを中心に加工を再開したいという動きが見られたら、DINASも協力してほしい。 | | |
| ⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア: | | |
| ⑮事業をやってきた中で言える(直面した)該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響: (特に98年の住民会議より得た印象) 残った人々は総じて高いやる気を持っていないようであった。橋氏の報告書によれば、97年度のトライアル時にも当初興味を持っていたメンバーが次第にプロジェクト離れをしていき、最終的に活動を続けていたメンバーは橋氏との個人的関係から参加しているようだった、ということである。 その個人的関係を持っていた人々がマレーシアに行ってしまったので、残ったメンバーだけでは事業継続するのは困難であった。 | | |
| ⑯その他: | | |

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

| | | |
|---|---------------------|-----------------------|
| ①分野名 : 村落開発・市場調査 | ②事業名: カシューナッツ二次加工事業 | ⑦投入資金(Rp.) |
| ③開始時期: 1997年4月～現在まで | | 1997:1juta |
| ④対象集落: リブレン村ワトゥ集落 | | 1998:10juta |
| ⑤対象者 : 97年 女性中心の40名 98年 男性 75名 女性 8名 | | 1999: Total 11juta |
| ⑥実施協力機関: 住民及び JICA | | |
| ⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): | | |
| <p>97年時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女性を中心とする余剰労働力の活用 ・加工による付加価値づけと収入向上 <p>98年時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カシュー農園の生産性向上 ・加工による付加価値づけ ・上記2点を通じた農家の収入向上 <p>特に女性に対し、就労機会の提供</p> | | |
| ⑨事業開始までの経緯: | | |
| <p>97年時</p> <p>橘氏</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ PPWT 内6カ村の全集落を対象に農園面積に関するアンケート調査 農園面積・収穫量の上で、ダチホン集落とワトゥ集落が比較的ポテンシャルの高いことが把握された。 ・ 南スラウェシ州内カシューナッツ流通調査(市場と流通調査) 加工後カシューの販路としてウジュンパンダンの工場に可能性を見出す。 ・ クンダリ・ロンベ視察 加工技術が比較的習得しやすいことを理解 ・ 住民会議の実施(こちらから提案する形) 加工をしたことない住民達もすっかりその気 (ワトゥ州道から外れた下の部分で実施) ・ 対象者の選定 農民グループに任せ、40名が選出された。 ・ 資機材、原料調達 ・ トライアル実施 | | |

98年時
橋氏、高橋

- ・ 農民グループリーダーへのインタビュー
今年度も加工を継続する意思が確認された。また今年度は農園管理の支援もしてもらいたい旨、伝えられる。
- ・ DINAS PERKEBUNAN と計画作成
昨年度はトライアルということで JICA と住民だけで事業展開を図ったが、今年度からは協力関係を密にすることを確認。
- ・ 農民グループリーダーへインタビュー
実はワウ集落には2つの農民グループがあり、そのどちらに対しても、農園管理・加工の支援をして欲しい旨伝えられる。
- ・ 住民会議(農園管理)
今年度計画の概要を決定。DINAS と JICA と住民間での役割分担について合意された。
- ・ 住民会議(加工)
当日住民が集まらなかったもので、話し合ってもらいたいことだけ伝え、JICA は引き上げる。この時、今年度の原料収穫量が少ないようなので、加工は2つのグループを1つにまとめることが決定。結局集まったメンバーは、昨年から一新された。

⑩ 方法についての特記点

投入: 97年 皮むき機*4 オープン*1 かまど*1 実を取り出す道具*1
シドラップ研修、UP 工場見学

98年 皮むき機*4 (ダチホン集落から回収したもの)
肥料 NPK 900kg (農園管理の良好な農民を対象に配布。25人?)
シドラップ研修、UP 工場見学
技術講習会*2、セミナー

| 特記点 | 意図 |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ パル島の奨励作物であるカシューナッツの産業化 ・ 男性と女性の役割分担に配慮した活動展開 (98年より) ・ 相談型アプローチ ・ 他者からグループへ(JE は基本的に技術指導を行わない。できない?) ・ 不定期集会の開催 | <ul style="list-style-type: none"> ・ イ側開発政策の支援 ・ 特に女性に開発機会を提供 ・ 自助意識醸成・ニーズとの整合性 ・ イ国内、相互コミュニケーションルートの開拓 ・ 興味の持続 |

⑪ これまでの成果:

活動が始まってから既に2年が経過しているが、今も残っているメンバーは昨年よりのメンバーのため、実質的には今年が2年目。昨年は加工をすることによって、結局5万ルピアの赤字となってしまった。

加工技術も上達した今年は、是非とも黒字を出したいところ。

⑫現状・問題点(反省を含む):

加工グループ:現在のメンバーは登録9名、実質7名とごくわずか。でもやりやすい。話しによると今年は2名くらい増えるらしい。現在グループが抱えている問題はいかにして上手に皮を剥き、売り上げを伸ばすかということ。もしも沢山儲かったら、今度は加工が出来ない時期に養鶏か、裁縫教室を開きたいという夢がある。

農民グループ:現在のメンバーは75名。昨年肥料を配布された農民達は、今年の収穫がこれで増えると単純に喜んでいる。現在グループの興味はさらなる援助をいかにして JICA から引き出すか、ということ。

隊員:他の仕事との兼ね合いで、カシューナッツにかける労力が思ったより少ない。特に農民グループはまとめあげるのが困難で、くたびれている。昨年の Kepala Dinas との話では今年度ワケ集落の肥料は Dinas 持ち、ということで決定され、予算70juta 相当申請したはずであったが、Kepala Dinas が替わり、話しがもとに戻ってしまった。彼曰く、「農園を発展させるには肥料が必要であるが、そのための資金が Dinas にはないので、JICA がなんとかしてくれないか」。やれやれ。また DINAS の興味がかシューからクミリやカカオに移っているので、どうなるか掴めない。

農民グループに対して、当初は肥料配布→収穫増、といった成功例をつくれれば、他の農民もそれを真似していくのではないかと期待していたが、今のところそのような動きなし。相変わらず肥料はどこかよそがくれるものと思っている様子。

加工グループは特に問題なし。あえていえば相変わらず会議の場において、リーダーと会計の2人しか発言せず、他のメンバーはそれに賛同するだけなので、なんとかもつとグループ内の意見交換を活発にしてもらいた。

⑬解決方法・ハル県におけるフォローアップへの提言:

農民グループ:営農努力の推進

今まで施肥経験のなかった農民が体験的に肥料の効果について感じたことを、今後自らの努力、あるいは DINAS の支援のもとに、いかに発展させていくか。

農民はもっと営農に興味をもち、頻繁に農園に入っていくことが期待される。

DINAS は興味と対象地域がコロコロ変わるので、できるだけ一つづつ片づけていくような方針に変えることが必要。またそれに対してきちんと予算を計上し、使用すること。

加工グループ:販路確保

加工グループに関しては DINAS から特別な協力が得られないでもやっていけるようにしたいが、もし DINAS がその気であれば、共同出荷体制を整えられると好ましい。なぜなら、現在の販売先である UP の工場はあまり少量の加工ナッツを持っていくと、いい顔をしないから。

⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

今回の教訓: 当面必要な資機材は DINAS が調達するか貸し出す形がよい。また最初の1、2年は利益はあがりにくいだろうが、根気強く指導を続け、興味を持続させていくことが必要。

また DINAS は対象グループに男性を選びやすいが、地元の役割分担を考慮しそれに合った対象者を選定していくことが求められる。

先進地域を視察してみても言えることは、どのグループも核となる人材がきちんと村側にいる。JICA のとったアプローチはリーダーに特化して活動支援していくことではなかったが、もしかしたら、とりわけリーダーに集中的な指導が必要であるのかもしれない。

さらにグループと商人の関係(pemasaran)は農家収入に直接影響のある要因であるので、その整備も必要となってくる。

⑮事業をやってきた中で言える(直面した)該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響:

加工グループは、こちらから意図的に組織化したのではなく、リーダーを中心とした小人数の仲良しグループであり、それがプロジェクトには好影響を与えていると考えられる。

ワウ集落で行った山羊銀行プロジェクトでは、グループ内の利害関係が一致せず、メンバーのなかに「結局自分の取り分がどれだけになるか」という点で、いざこざが起こりやすかったが、それと比較してみると、加工グループでは「全員が一様に収入向上を果すために」という意識が多少強いと思われる。

またこれは方法とも関係するが、山羊の場合、日ごとに飼育担当者が変わるので、結局一回につき一人の労働、その繰り返しであったが、加工作業では一回につき全員参加なので、より平等感が育成されやすかったとも考えられる。

ワウの場合、特に言えるだろうことは、女性は面倒な仕事をあまりしたがらないことである。今までの習慣の中で行ってきた事柄があり、それと一致しないような活動はここではあまり受け入れられない。例えば女性対象とした家庭菜園プログラムは鍬などを使ったりする必要があるので、この地域ではうまくいかないことが予想される。

⑯その他:

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

| | | |
|--|--|--|
| ①分野名 : 家畜飼育 ②事業名: バリ牛普及事業 | | ⑦投入資金(Rp.) |
| ③開始時期: 1996 年度後半～ (4年目) | | 1997: 33,267,100 |
| ④対象集落: 4カ村9集落 Palakka 村 Pange,Palakka Anabanua 村 Gellengenge,Allejjang,Bangabangae Tompo 村 Barang,Tompo,Batulappa Galung 村 Kalompi | | 1998: 6,601,600 1999: 7,373,200 Total 47,241,900 |
| ⑤対象者 : 農家(成人男性) 50人 | | |
| ⑥実施協力機関: DINAS Peternakan | | |
| ⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): ・バリ牛普及事業を通し農民の家畜に関する知識、飼育技術の向上及び繁殖飼育一貫経営サイクルの確立。 ・継続的に牛を飼育することによる家計の安定及び、収入の増加。(契約終了後) (a) ・(b) 該当無し。 求められていたの? | | |
| ⑨事業開始までの経緯: ・1996年4月～1996年12月 雄育成牛の舎飼による肥育試験事業 (飼料給与比較試験/飼槽比較試験/素牛成長比較試験) 牛売却にあたり、付加価値をつけて単価を上げるのがねらい。 ・1996年4月～1997年3月 市場調査隊員による肉牛の流通システム調査 ・1996年10月～ 肥育試験事業の結果を受け、繁殖牛普及事業を開始。 ・どのようにして対象集落、対象者が選ばれたのかを説明。 対象村内の集落長に該当者を紹介してもらい、隊員とフルタイムカウンターパートが直接該当者を訪ね、飼育能力、飼育環境について検討、了解後、正式に選出。 <該当条件> ・農業を生業としている。 ・家畜を多く保有しない。 ・牛舎を建設する土地を用意できる。 ・十分な飼料を用意できる。 ・過去、行政からの援助を受けていない。 ・出稼ぎにいかず、長期的に在住する。 | | |
| ⑩方法: 投入と特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図 | | |
| 投入: 農家1人あたり雌牛2頭。 畜産事務所推薦の家畜商人より購入し導入。 耳標をつけ個体の識別をする。 | 投入についての説明: 村長に説明後、集落長に事業の説明をし、条件に該当する人物の名前を挙げてもらう。導入する牛の頭数は予め目安を付けてあり、集落長が推薦する人物を隊員とカウンターパートで確認し、最終的に選抜した。この過程で、導入を断念した集落もある。 | |

| | |
|--|---|
| <p>特記点:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・死亡した個体、不妊の個体について、補充・交換を保障する。 ・牛舎を用意させる。 ・飼料分析実施。 ・講習会の実施 ・梓場の設置。 <p>(畜産事務所からの依頼。他地域にはあるが、バル郡ではまだ設置されていない。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的な村内巡回。治療及び飼育指導。 | <p>意図:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・牛の頭数増加を補助する。 ・管理飼育の強化を図る。 (家畜の健康維持、繁殖率の増加、事故防止) ・具体的な飼料の紹介により、有効利用を図る。 ・飼養知識の向上。 ・治療及び人工授精実施の容易化。 <ul style="list-style-type: none"> ・家畜の健康維持、繁殖率の増加、事故防止。併せて繁殖結果調査。 |
| <p>⑪これまでの進捗状況と成果:</p> | |
| <p>1997年母牛死亡 5頭 補充 2頭 分娩 0頭 育成牛 0頭 1998年母牛死亡 4頭 補充 3頭 分娩 39頭 育成牛 24頭 1999年母牛死亡 1頭 補充 3頭 分娩 28頭 育成牛 21頭 1999年7月末日現在:母牛 98頭 育成牛 45頭 梓場設置 6基(予定 9基) 材料準備—JICA、建設・設置—村人。 講習会開催。指導用冊子作成。</p> | |
| <p>⑫現状・問題点(反省を含む):</p> <p>集落内へ巡回すると、農家側から牛についての連絡が来るようになった。 バル事務所まで連絡に来ることは稀。</p> <p>農家側の基本的飼養姿勢: 牛の体調が悪い→治療して欲しい→治療代がかかるなら不要。※1 家畜の死亡を予防しようという概念が無い。 牛が米ぬか、塩を好むという知識は定着しつつある。 牛舎飼いへの期待感、必要性薄い。 毎日世話をし、いつでも繋留できるような関係を保つのは、時に負担になっているようである。 畜産事務所の事業のやり方は一方的なようである。また、プロジェクトに対する目的意識または、成果達成義務感が薄い。</p> <p>ex. 予算→用意できる牛の頭数→Lokasi、Petani選抜→牛導入→農家からの連絡待ち。※2 ※1と※2の悪循環になっている。</p> <p>JICAと、Dinasの活動・サービスが同調・協調してない。(治療の無料サービス、繁殖追跡調査) よって、JICA帰国後農家の意識は変化するであろう。(連絡の停滞、治療断念、返却見通しを考えない。)</p> | |
| <p>⑬今後の課題と解決方法・バル県におけるフォローアップへの提言:</p> | |

今後の課題:

○農家

- ・家畜の健康に対し毎日注意を払う。早期に治療を行なう。
- ・他の農家の家畜の状況にも注意が必要。(伝染病、病気、事故の予防)。
- ・ワクチネーションなど、Dinas のサービスへの積極的な参加。
- ・Dinas 職員からの畜産知識の吸収。
- ・行政からの指示に従う。Bantuan の契約の遵守。
- ・頭数だけでなく、質(状態)も考慮した畜産経営を心がける。

○畜産事務所

- ・ワクチネーションの徹底。治療の必要性の理解を促す。

牛の病気は伝染性のことが多い。そのため、地域で連帯して、病気の排除・予防につとめなければ、家畜は常に伝染性の病気に犯される状況にある。ワクチンの継続的、定期的な摂取、感染個体の淘汰などを徹底して行なう必要がある。

- ・農家に対する効果的な家畜飼養指導。
- ・契約内容、契約期間の遵守。
- ・既に、頭数は増えつつあるので、個別対応ではなく、全体(畜産全体、および他の農業生産部門との関係)を見据えた畜産経営指導が必要である。
- ・バリ牛の特性を生かした畜産の展開。

⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

農業が発展するに連れて、畜産、畑作、稲作は専門化が進む。バル県のように、牛を個人で小頭数保有し、空き地に放牧する方法では、将来、他の農業部門と衝突するであろう。牛専用の一定の面積の放牧地と牛舎、飼料作物の栽培、残渣の収集など天然飼料以外の飼料を用意し、複数の個体を家畜専用の土地で飼育する方法をとってはどうか。(牛所有者が複数で、経営・管理にあたる)。

※バル郡は、この段階ではない。

今後おそらく、どの地域でも、牛は、役肉兼用から、肉用牛へと推移していくであろう。単価の高い牛は、専門化の進んでいない地域では、ニーズは高い。しかし、いたずらに頭数を増加するだけでは、他の農業部門との競合、または、家畜同志が競合することも考えられる。

現段階では、事業が終了していないので、この事業に対する反省に基づいたアイデアはまだ出せないが、頭数を増加させるとともに、農家の経営能力を高め、地域全体で畜産業を営もうという連携を取ることが必要と思われる。およそ2年や5年のターンでは実施しにくい。また、適した集落-畑作に不適な広い土地と、労働力の余力のある集落、ここで言うなら、AllejjangかBangabangae-を選んで、集中的に指導するほうが効果的である。

地域的に、20代の青年層が村を出て働きに行っており、残っている人は、保守的な高齢者、活動的な人は公務員や、別に商売をしていたりする。その他は、若すぎて発言力を持ってない年齢層と女性になる。土地がやせているからか、農地に対する執着心が低いように思う。こういう(文化人類学的な?)調査をプロジェクト実施地域を選定する段階で行わないと、成果につながらないのでは。役所の出すプロポーザルだけでは、外部の人間に説明するに足るような地域の特性を把握し切れておらず、不十分なのではないか。

⑮事業をやる上での該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響（セミナー発表内容ではない）

- ・ 畜産事務所に対する信頼感を持っている。
- ・ JICA の行うサービスには協力的である。
- ・ 仔牛の変調には、比較的早く気づいている。
- ・ JICA に対し、薬を要求する人と、まったく個人で管理している人に別れる。
- ・ なぜ産まないのか、なぜ死んだのか、考える人が少ない。よって、産むためにはどうすればいいのか、死なないようにするにはどうすればいいのか、考える人も少ない。
- ・ 家畜が死ぬことを素直に受け止めている。
- ・ 返却対象の仔牛を早く手放したがる傾向がある。
- ・ 家畜は個人・家族で管理するという慣習のためか。自分の牛＝自分の財産 のことで頭がいっぱい、他人の牛に興味を持たない。よって、知識や経験が波及しない。
- ・ 牛が痩せてしまっても、死ぬまであきらめない。（のはいいが、太らそうともしない。）
- ・ 子供にも十分な栄養を与えられていないことを自覚していないようなので、牛の栄養まで意識がないのは当然かもしれない。
- ・ 女性が牛の飼育に携わることは少ないが、補助的な働きをする人もいる。（特別な集落に限らない）

⑯その他：

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

| | | | | | |
|---|--|-------------------------|---|-----------------|--|
| ①分野名 : 家畜飼育 | | ②事業名: 山羊飼育普及事業(山羊銀行)まとめ | | ⑦投入資金(Rp.) | |
| ③開始時期: 1997 年度後半～1999 年度 (継続中)ワトゥ集落除く | | | | 1997: 4.153.000 | |
| ④対象集落: Anabanua 村 Gellengnge 集落 Palakka 村 Camming 集落 Libureng 村 Watu 集落 Tompo 村 Pelleng mallimpo 集落 | | | | 1998: 2.290.000 | |
| | | | | 1999: 5.677.000 | |
| | | | | Total12.120.000 | |
| ⑤対象者 : 女性グループ 25 名(ゲレンゲ集落のみ 20 名) | | | | | |
| ⑥実施協力機関: 将来的に DINAS Peternakan。現在は隊員チーム独立実施。 | | | | | |
| ⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): ・山羊飼育普及による身近な収入源増加 (a) ・女性の経済活動、集団活動の活性化 (b) | | | | | |
| ⑨事業開始までの経緯: ・1997 年 4 月、前リーダー杉永氏と、前家畜飼育隊員和田氏により、現地 NGO がジョクジャカルタで手がけている山羊銀行の視察が行われた。 ・市場調査隊員による山羊流通調査。(山羊購入にあたり、山羊価格相場、山羊市場の動向を家畜飼育隊員からお願いした。) ・貧困層、そして女性を対象ということで選択した、インドネシア政府が貧困層に指定しているアナバナア村ダチボン集落で始めに聞き取り調査を行ったが、ほとんどの村人が山羊に関心を示さなかった。理由として、「山羊はこの集落ですでにたくさん飼育されている。もういらない、牛がよい。」 ・1997 年春、JICA が隣のバンガバンガエ集落で試験飼育をした山羊がほとんど死んでいるのを知っているため、「山羊はすぐ死ぬからいらない」という人が多かった。 ・女性を中心に聞き取りをしたが、「子供の世話がたいへんで山羊は飼えない」という意見もあった。 ・貧困層と言われている集落であっても、山羊飼育に関心のないところは対象外にせざるを得なかった。 ・JICA の他プロジェクト(生活用水、カシューナッツ加工、バリ牛)がすでに入っている集落は話しを持って行きやすかった。 | | | | | |
| ⑩方法: 投入と特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図 | | | | | |
| 投入: 1997 年 豆山羊 オス 1 頭、メス 4 頭/グループ 1998 年 同じ 1999 年 同じ | | | 投入についての説明: 1997 年 5 名/グループ。 1 小屋/グループ。 1998 年 4 名/グループ 1 小屋/グループ 雌山羊: 1 人 1 頭飼育、 雄山羊: グループ内持ち回り飼育 1999 年 1998 年と同じ | | |
| 特記点: ・女性グループへの貸し出し。 ・2 年後に返却、Waiting Group へ再貸し出し ・飼育日誌の記録 ・定期集會開催(1 ヶ月に 1 回) | | | 意図: ・女性の経済活動・集団活動の活性化 ・事業の自立的持続、普及効果 ・所有意識の強化。飼育技術促進。 ・集団活動の活性化。飼育技術の指導。 | | |

⑪これまでの進捗状況と成果:

・ワトゥ集落全グループとゲレンゲの2グループが飼育を辞退した。理由は、「グループ「世話をするのが難しい」、「他人の畑を荒らしたため、飼育を続けることが困難」である。他人の畑を荒らさないようにつなぎ飼いをすすめていたのだが、それでは「山羊が十分にえさを食べられない」とグループメンバーは言う。これに関してもずっと、「他の場所からえさを刈ってきて与えるように」と言っていたのだが、そこまで面倒がみられなかったようである。

⑫現状・問題点(反省を含む):

・ワトゥ集落以外でグループ問題が生じないのは、ひとつにグループが血縁関係で構成されているところが大きいだろう。今後の他集落での普及には、作られたグループの血縁関係を調べておく必要がある。
 ・導入時、山羊がまだ小さかった(繁殖月齢に達していなかった)ことが、繁殖を送らせる原因となった。
 ・1度出産を経験している月齢1才半から2才のメス山羊を導入したほうがよいだろう。

⑬解決方法・バルー県におけるフォローアップへの提言:

・DINASの職員には、もっと村へ入ってもらい、村人の声を聞く機会をもってほしい。

⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

・山羊を導入する際、山羊の有名な産地から連れてくるよりも、事業を行う地域に適した山羊にしたほうが、気候、環境面において山羊が順応しやすい。事業を行う地域の中で山羊を探し、その地域の家畜商人や村人から情報を得、適した山羊を導入する。
 ・山羊に限らず、村人にとって重要なのは「有名な産地の家畜」ではなく、彼等の住む「地域に適した家畜」である。

⑮事業をやる上での該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響(セミナー発表内容じゃないです)

・メンバーである女性たちが積極的に飼育に携わっている集落はペレマリホ集落を除いてみられない。しかし、家族のなかの男性が彼女たちと協力して飼育をしている姿がみられる。
 ・どの集落も家畜飼料としての草木に困ることはない。

⑯その他:

・グループでの飼育で良い結果は得られなかったが、グループ飼育でも、メンバーに血縁関係があれば、うまくいくようだ。こういうかたちはグループ飼育といわないのだろうが。

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

| | | | | | |
|--|--|----------------------|-----------------------|-----------------|--|
| ①分野名 : 家畜飼育 | | ②事業名: 山羊飼育普及事業(山羊銀行) | | ⑦投入資金(Rp.) | |
| ③開始時期: 1997年度後半~1999年度(継続中) | | | | 1997: 2.240.000 | |
| ④対象集落: Anabanua 村 Gellengnge 集落 | | | | 1998: | |
| ⑤対象者 : 女性グループ 20名 | | | | 1999: | |
| | | | | Total 2.240.000 | |
| ⑥実施協力機関: 将来的に DINAS Peternakan。現在は隊員チーム独立実施。 | | | | | |
| ⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): | | | | | |
| ・山羊飼育普及による身近な収入源増加 (a) | | | | | |
| ・女性の経済活動、集団活動の活性化 (b) | | | | | |
| ⑨事業開始までの経緯: | | | | | |
| ・1997年4月、前リーダー杉永氏と、前家畜飼育隊員和田氏により、現地NGOがジョクジャカルタで手がけている山羊銀行の視察が行われた。 | | | | | |
| ・市場調査隊員による山羊流通調査。(山羊購入にあたり、山羊価格相場、山羊市場の動向を家畜飼育隊員からお願いした。) | | | | | |
| ・貧困層、そして女性を対象ということで選択した、インドネシア政府が貧困層に指定しているアナバヌア村ダチボン集落で始めに聞き取り調査を行ったが、ほとんどの村人が山羊に関心を示さなかった。理由として、「山羊はこの集落ですでにたくさん飼育されている。もういらない、牛がよい。」 | | | | | |
| ・1997年春、JICAが隣のパンガパンガエ集落で試験飼育をした山羊がほとんど死んでいるのを知っているため、「山羊はすぐ死ぬからいらない」という人が多かった。 | | | | | |
| ・女性を中心に聞き取りをしたが、「子供の世話がたいへんで山羊は飼えない」という意見もあった。 | | | | | |
| ・貧困層と言われている集落であっても、山羊飼育に関心のないところは対象外にせざるを得ず、最後にゲレンゲ集落に話を持っていったところ、集落長宅周辺に住む村人は「いらない」、村内事務所周辺に住む村人は「飼ってみたい」と意見がわかれたため、村内事務所周辺の村人のなかで対象者を選んでもらえるよう集落長にお願いした。 | | | | | |
| ⑩方法: 投入と特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図 | | | | | |
| 投入: | | | 投入についての説明: | | |
| 1997年 豆山羊 オス1頭、メス4頭/グループ | | | 5名/グループ。 1小屋/グループ。 | | |
| 特記点: | | | 意図: | | |
| ・女性グループへの貸し出し。 | | | ・女性の経済活動・集団活動の活性化 | | |
| ・2年後に返却、Waiting Groupへ再貸し出し | | | ・事業の自立的持続、普及効果 | | |
| ・飼育日誌の記録 | | | ・所有意識の強化。飼育技術促進。 | | |
| ・定期集会開催(1ヶ月に1回) | | | ・集団活動の活性化。飼育技術の指導。 | | |

⑪これまでの進捗状況と成果:

- ・1999年6月、2グループが飼育を辞退した。理由は、「世話をするのが難しい」、「他人の畑を荒らしたため、飼育を続けることが困難」である。他人の畑を荒らさないようにつなぎ飼いをすすめていたのだが、それでは「山羊が十分にえさを食べられない」とグループメンバーは言う。これに関してもずっと、「他の場所からえさを刈ってきて与えるように」と言っていたのだが、そこまで面倒がみられなかったようである。
- ・ゲレンゲ集落は、グループ問題はなく、グループの中には非常に熱心に飼育をしているところもあり、仔山羊も丈夫に育っている。

⑫現状・問題点(反省を含む):

- ・ゲレンゲ集落でグループ問題が生じないのは、ひとつにグループが血縁関係で構成されているところが大きいだろう。今後の他集落での普及には、作られたグループの血縁関係を調べておく必要がある。
- ・導入時、山羊がまだ小さかったことが、繁殖を送らせる原因となった。
- ・今後は、1度出産を経験している月齢1才半から2才のメス山羊を導入したほうがよいだろう。

⑬解決方法・パル県におけるフォローアップへの提言:

- ・DINASの職員には、もっと村へ入ってもらい、村人の声を聞く機会をもってほしい。

⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

- ・山羊を導入する際、山羊の有名な産地から連れてくるよりも、事業を行う地域に適した山羊にしたほうが、気候、環境面において山羊が順応しやすい。事業を行う地域の中で山羊を探し、その地域の家畜商人や村人から情報を得、適した山羊を導入する。
- ・山羊に限らず、村人にとって重要なのは「有名な産地の家畜」ではなく、彼等の住む「地域に適した家畜」である。

⑮事業をやる上での該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響(セミナー発表内容じゃないです)

- ・ゲレンゲ集落は家畜の飼料が豊富で、山に放しておけば十分な飼料が得られる。他集落ではみられない飼料木もみられる。それらを上手に利用して飼育をしている。山羊飼育に対して顕著な姿勢が見うけられる。

⑯その他:

- ・グループ飼育でも、メンバーに血縁関係があれば、うまくいくようだ。こういうかたちはグループ飼育といわないのだろうが。

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

| | | |
|---|--|-----------------|
| ①分野名 : 家畜飼育 ②事業名: 山羊飼育普及事業(山羊銀行) | | ⑦投入資金(Rp.) |
| ③開始時期: 1997 年度後半～1999 年度後半 (2年) | | 1997: 1.913.000 |
| ④対象集落: Libureng 村 Watu 集落 | | 1998: |
| ⑤対象者 : 女性グループ 25 名 | | 1999: |
| | | Total 1.913.000 |
| ⑥実施協力機関: 将来的に DINAS Peternakan。現在は隊員チーム独立実施。 | | |
| ⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): ・山羊飼育普及による身近な収入源増加 (a) ・女性の経済活動、集団活動の活性化 (b) | | |
| ⑨事業開始までの経緯: ・1997 年 4 月、前リーダー杉永氏と、前家畜飼育隊員和田氏により、現地 NGO がジョクジャカルタで手がけている山羊銀行の視察が行われた。(山羊飼育開始にあたっての詳細は不明) ・市場調査隊員による山羊流通調査。(山羊購入にあたり、山羊価格相場、山羊市場の動向を家畜飼育隊員からお願いした。) ・貧困層、そして女性を対象ということで選択したが、貧困層と言われている集落であっても、山羊飼育に関心のないところは対象外にせざるを得なかった。ワトゥ集落は同じく女性を対象としたカシューナッツ加工事業も行われていることもあり、女性の活動が活発に行われることを期待してこの集落とした。対象者は農民グループリーダーをお願いして選んでもらった。 | | |
| ⑩方法: 投入と特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図 | | |
| 投入: 1997 年 豆山羊 オス 1 頭、メス 4 頭/グループ | 投入についての説明: 5 名/グループ。 1 小屋/グループ。 | |
| 特記点: ・女性グループへの貸し出し。 ・2 年後に返却、Waiting Group へ再貸し出し ・飼育日誌の記録 ・定期集会開催(1 ヶ月に 1 回) | 意図: ・女性の経済活動・集団活動の活性化 ・事業の自立的持続、普及効果 ・所有意識の強化。飼育技術促進。 ・集団活動の活性化。飼育技術の指導。 | |
| ⑪これまでの進捗状況と成果: ・1999 年 2 月でワトゥ集落の山羊銀行を終了せざるを得なくなりました。原因は、グループ飼育の意図をグループメンバーに理解してもらえなかったこと、山羊が多く死んでしまい、メンバーのやる気が損なわれてしまったことがあげられる。 | | |
| ⑫現状・問題点(反省を含む): | | |

・村落開発普及員隊員実施の「評価会議」において、グループメンバーから、ワトゥ集落における男女の仕事の役割を聞き、この集落では女性が外に出て田畑の仕事をしたり、家畜の世話をすることは一般的ではない、ということがわかった。このことを始めに調査しておかなかったのは隊員の否である。しかし、初め彼女たちがJICAのやりかたに興味を示し、山羊を飼ってみようという意識があったことも事実である。が、グループで飼育することについてはグループ内の有力メンバーが5頭の山羊を一人じめしてしまうという問題も生じた。

よって、今後の山羊銀行においては、方法を変え、グループではあるが、メスは一人1頭と担当を決め、オスはグループ持ちまわり飼育ということにした。

⑬解決方法・バルー県におけるフォローアップへの提言:

⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

⑮事業をやる上での該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響(セミナー発表内容じゃないです)

・おもに男性が外で働き、女性は家の仕事をする。稲収穫時も女性が手伝いにすることはほとんどない。

・仔山羊が生まれ、飼育意欲が出てきたグループもあったが、相次ぐ山羊の死でメンバーが飼育に飽きてしまった。

・女性が対象の活動であったが、夫、息子、兄弟等、男性の助けもかりて飼育をしていた

⑯その他:

スラウエシでグループ飼育は困難。

事業紹介シート(セミナー発表イメージ)

| | | | | | |
|---|--|---|--|-----------------|--|
| ①分野名 : 家畜飼育 | | ②事業名: 山羊飼育普及事業(山羊銀行) | | ⑦投入資金(Rp.) | |
| ③開始時期: 1998 年度後半～1999 年度 (継続中) | | | | 1997: | |
| ④対象集落: Palakka 村 Camming 集落 | | | | 1998: 2.290.000 | |
| ⑤対象者 : 女性グループ 25 名 | | | | 1999: 425.000 | |
| | | | | Total 2.715.000 | |
| ⑥実施協力機関: 将来的に DINAS Peternakan。現在は隊員チーム独立実施。 | | | | | |
| ⑧目的(主に、(a)生計向上の側面、(b)住民の自治能力向上の側面に照らし合わせて): | | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・山羊飼育普及による身近な収入源増加 (a) ・女性の経済活動、集団活動の活性化 (b) | | | | | |
| ⑨事業開始までの経緯: | | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・1997 年 4 月、前リーダー杉永氏と、前家畜飼育隊員和田氏により、現地 NGO がジョクジャカルタで手がけている山羊銀行の視察が行われた。 ・市場調査隊員による山羊流通調査。(山羊購入にあたり、山羊価格相場、山羊市場の動向を家畜飼育隊員からお願いした。) ・貧困層、そして女性を対象ということで選択した。これは今までのやり方と同じである。対象者は集落長とイマムにお願いした。今までとやり方を変えたところは、1 グループ 4 名、メス山羊は 1 人 1 頭飼育、オス山羊はグループ内持ちまわり飼育という点、飼育する山羊は JICA が探すのではなく、自分達で探すという点である。このようにすれば、「自分の山羊」としての自覚ができ、ひとりひとりが責任をもって飼育できるのではないかという隊員の考えによる。 | | | | | |
| ⑩方法: 投入と特記点(既存の政府事業あるいは慣習との相違点を比較する)とその意図 | | | | | |
| 投入: | | 投入についての説明: | | | |
| 1998 年 豆山羊 オス 1 頭、メス 4 頭/グループ | | 4 名/グループ。 1 小屋/グループ メス山羊: 1 人 1 頭飼育 オス山羊: グループ内持ちまわり飼育 | | | |
| 特記点: | | 意図: | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・女性グループへの貸し出し。 ・2 年後に返却、Waiting Group へ再貸し出し ・飼育日誌の記録 ・定期集会開催(1 ヶ月に 1 回) | | <ul style="list-style-type: none"> ・女性の経済活動・集団活動の活性化 ・事業の自立的持続、普及効果 ・所有意識の強化。飼育技術促進。 ・集団活動の活性化。飼育技術の指導。 | | | |

⑪これまでの進捗状況と成果:

- ・集落長とイマムが積極的に飼育に携わっている。しかし、イマムの妻担当山羊が死亡してからは、ほとんど関わっていない。
- ・集落長は小屋作りを工夫している等、熱心に飼育をしている。
- ・チャミン集落はほとんど血縁関係でグループが作られているため、グループ問題はみられない。

⑫現状・問題点(反省を含む):

- ・グループが血縁関係で構成されている点に問題はみられないが、某グループのメンバーが突然 JICA 側への報告なしにマレーシアに行ってしまう、「山羊の面倒がみられない」という問題が生じた。「山羊が畑を荒らして困る」という近所の苦情がでるグループもあった。この問題はグループメンバー、隊員、CP、近所の農民との話し合いにより解決した。「畑を荒らす」という近所の苦情に関しては、隊員もよくメンバーに注意しているが、それでもつなぎ飼いにしていないグループもあり、実際苦情が出てからことの重要さに気づき、あげくに「飼育をやめる」ということにもなってしまう。

⑬解決方法・パル州におけるフォローアップへの提言:

- ・同じ

⑭他地域での展開や類似事業に向けてのアイデア:

- ・同じ

⑮事業をやる上での該当集落の特徴、住民の態度とその事業への影響(セミナー発表内容じゃないです)

- ・集落長、イマムが積極的に参加している。彼等から Kader 案も出された、が、その後彼等からの働きかけはない。
- ・グループの女性達に目だって積極的なところは見られないが、家族の男性(夫、兄弟、親戚)の協力を得て飼育をしているグループが多い。

⑯その他: